

「艶容女舞衣」

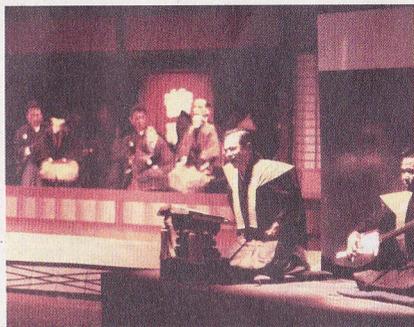
舞台

法善寺 (大阪府)

氷雨が石畳をぬらしている。大阪・ミナミの法善寺。別称を千日寺という。飲食店が並び、深夜まで酔客でにぎわう門前の「千日前」が、江戸期には刑場や墓地、火葬場だったとはにわかに信じがたい。芝居小屋が軒を連ねた道頓堀も目と鼻の先だった。

△霜夜に冴ゆる月代の、更け行く空にしんしんと、身にしみじみと冷えわたる、千日

名作 探訪



艶容女舞衣 心中事件を劇化した海音の「笠屋三勝廿五年忌」などを下敷きに1772年(安永元年)、3巻の人形浄瑠璃として初演。現在は下巻にあたる「酒屋の段」「道行霜夜の千日」のみ上演される場合が多い。

「酒屋の段」を語る豊竹英大夫さん(中央)(2000年12月、大阪・旧近鉄小劇場で) 撮影・酒井羊一

ネオンの夜 心中の闇遠く

寺の鐘の音に、引かるるごとくやうやうと、火屋の辺りに着きにける▽

千日前で実際に起きた心中事件を題材にした文楽「艶容女舞衣」のラスト、主人公・半七と恋人の女舞芸人・三勝が心中に向かうシーンだ。火屋とは火葬場のことで、

「さいたら畑」と呼ばれた。地獄と極楽の間、彼岸

法善寺 千日念仏を行ったことから千日寺とも呼ばれる。境内には本尊・阿弥陀如来や水掛不動、金毘羅堂があり、観光客が絶えない。周辺には飲食店が並ぶ路地「法善寺横丁」もある。地下鉄なんば駅から徒歩10分。

と此岸の間の畑を意味するという。

*

「男女の三角関係とはいっても、どろどろした嫉妬の話





ではない。許しと愛に満ちた物語だからこそ名作になった」。文楽太夫、豊竹英大(はななきだ)夫さん(64)が語る。

大坂・上塩町で酒屋「茜屋」を営む半兵衛の息子・半七は、お園という妻がありながら、愛人・三勝との間に子まで授かる。半兵衛は息子を勘当し、お園は実家に連れ戻される。半七はやがて、三勝に横恋慕する善右衛門をあやめてしまう。

△今頃は半七様、どこごろうしてござらうぞ▽で始まるお園のクドキ(心情吐露)は、名ぜりふとして知られ、同じ法善寺界限を舞台にした織田作之助の小説「夫婦善哉」にも引用された。

「ほろりとさせるクドキの場面は、悲しみをあふれさせるのではなく、涙をグツとこらえ、少し笑顔を作るような心持ちで語るほうがいい」としんしんと冷える冬の夜。提灯(ちようちん)がともる法善寺境内は参詣者だけでなく飲食店へ向かう人々の通り道にもなっている(大阪市中央区で)

英大夫さん。それが観客に人物の情を伝える文楽の妙味だという。

お園と半七は形ばかりの夫婦という設定だ。「半七と三勝は元々恋人同士だったが身分の違いから結婚できなかったのでは。半七は三勝に操を立てて、お園と閨を共にしなかった。純粋な男です」

お園は「私さえないければ」と我が身を責め、三勝はまな娘をお園に託して、罪人となつた半七と死出の旅に赴く。

半七は「未来は必ず夫婦にて候」としたためた遺書をお園に渡す。英大夫さんは「哀れなお園へのぎりぎりの愛情表現」とみる。三勝も焼き餅は焼かない。「本来は敵であるはずの妻と愛人が互いに思いやりと尊敬の念を抱き合い、恨みつらみは露ほどもない」

＊

法善寺から南東へ約200m、千日前通りに面した三津寺墓地に三勝半七の墓がある。と聞いた。三津寺の加賀哲郎住職(55)に案内してもらおう。古びた墓石は、いびつな形に削られ、碑銘さえない。

「昔は、芸事のお守りとして、二人の墓石を削って身に着ける役者さんが多かったそうです」と加賀住職。無縁仏も眠る墓地には、江戸初期に道頓堀を掘削し、後の繁栄の礎を築いた安井道頓の供養塔もある。

ビルの谷間にうずもれた寂しい墓地を一步踏み出せば、二人がたどったであろう夜の闇は想像もつかない。夕暮れの街のあちこちに、まぶしいほどのネオンがともり始めていた。

大阪文化・生活部 坂成美保
大阪写真部 守屋由子

＊ 次回は3月23日です。

伝統芸